

聴き耳を育てるといふこと

米屋 陽一

一 はじめに

私立中学・高校の教員になり、話すこと・聞くことの手子子どもたちを相手に、一斉授業を繰り返す中、小学校時代（一九五〇年代）の民話を聞いた楽しい授業がなつかしく思い出された。当時の担任は「民話の会」の運動に刺激されていたに違いない。また、学生時代に読んだ柳田国男の「昔の国語教育」（『国語の将来』）を読み直すと、「聴方」という課目を大切にすればよい」の一文が刺激的だった。口承文芸学や民俗学の成果を現場でどのように活かせるか、民話散歩、近所の古老を訪ねたりして「聴き耳を立てる授業」を実施したり、夏・冬・春休みに「こころみの旅（聴き耳の旅）」を企画したり、地元の民話や民話絵本の読み聞かせ（語り聞かせ）や紙芝居を演じたり、語り手・演じ手の養成も試みた。一九七二年から現在に至るまでの校内外における実践を報告したい。

（シンポジウムの「発言要旨」）

二 配布資料から

次に示すのは、シンポジウムの当日に配布した「参考資料」
 Ⅳである。「学校教育と口承文芸」に関わる学内外の実践を年代順に配列してみた。Ⅲは勤務校（中学）の国語科の授業時数を示したものである。途中で若干の変更はあったが二十数年間ほぼこの形が踏襲された。表の下方の「従来」で示した。「二〇〇二年度から実施」は現行の形である。

Ⅳ 一九七二年・中学校・高等学校の教員（国語科）になる

・校外授業として「文学（民話・歴史散歩）」を実施

・特別授業として「聴き耳をたてる授業」を実施

七七年・夏・冬・春休みを利用して「こころみの旅」を実施

・第一回実施「岐阜県宮川村・高山市」

八一年・自主活動サークルとして「真間川流域研究会」活動開始（一年間）

八三年・クラブ活動として「民話民俗研究部」活動開始（三年間）

九一年・第二十回実施（最終回）「沖縄県本島・石垣島・竹富島」

Ⅲ 国語（中学）カリキュラム
 [従来]

	一年（週⑥）	二年（週⑤）	三年（週⑤）
国語	4	4	4
言語表現	2	1	1
	国語	国語	古文

国語 (中学) カリキュラム		「二〇〇二年 度から実施」	
一年 (週⑤)	二年 (週④)	三年 (週④)	
国語 3	国語 3	国語 4	
言語表現 2	言語表現 1		

* 「言語表現」では「音声言語」を取り入れ、「話すこと・聞くこと」に力を入れている。

「参考資料」(1)～(5)も配布した資料である。シンポジウムの発言の中で若干触れたが、ここでは文献紹介に留めておきたい。

- (1) 野村純一他編『昔話・伝説小事典』『民話教育』『民話運動』『昔話と年齢』(みずうみ書房・一九八七年) ※筆者の担当した項目。
- (2) 拙稿「民話ライブラリーだれもが民話を学び、語れる場になれば」『子どもの文化』一九八六年・十一月号(子ども文化研究所/椋の木社)
- (3) 拙稿「子どもたちと民話を訪ねてーききみみの世界ー」『民話の手帖』一九七八年創刊号(民話の研究会)『日本民話の会/蒼海出版』※第一回「こころみの旅」の記録。
- (4) 『創造の世界』一九九二年・第二号(学校法人日出学園)※第二十回「こころみの旅」(最終回)参加者の文章。
- (5) 拙稿「聴き耳」を育てることからの出発『月刊ホームルーム』一九九八年・七月号(学事出版)

三 聞くことから語ることへ

「こころみの旅」が始まって間もない頃、「新しい教育をめざして」というメインタイトルを頂いて執筆した。その中で「柳田国男の提案」として「学校国語教育」に「昔の国語教育」の導入を提案していることを示し、「かつての村々のお爺さんやお婆さんは、子どもたちのよき国語の教師であったことは言うまでもないが、人間教育、社会教育の偉大なる教師でもあったのだ。」と記した。そして「試みの授業」として、「聴き耳を育てる」ということは、なにも教室の中で、教師が語り手になることばかりではない。教室の外に出て、聴き耳をたてる工夫をさせてみる。つまり、聴き耳を育てる野外授業である。へ土地の年寄からいろいろな話を聞かせてもらう。へ一人の人間が、その生き方を手さぐりしている時代に、民話は考えるヒントのひとつを与えてくれるかも知れない。自らが、この社会を担っている一人であることを自覚した時、聞くことから語ることへ移行が始まる。」と締め括った。(拙稿「中学生と民話ー聞くことから語ることへー」ことばと教育』一九七九年・第四十五号・三省堂)

一九八一年、自主活動サークルとして「真間川流域研究会」の活動は開始した。この一年間の活動は、現在の「総合学習」と通じるところがある。

「真間川流域を授業に」江戸川をはさんで東京都に隣接する市川市。市街地の中を桜並木のある真間川がゆったりと流れてい

る。——真間川は、どうしてこんなに汚れてしまったのだろうか。と子どもたちに呼び掛けると、すぐさま十数名が集まった。

「歩く見る聞く考える」土地の古老を訪ねて、聞き耳を立てることから仕事は始まった。古老たちが子ども達の頃橋の上から飛び込んだ話、ふな、どじょう、なます、めだか、おたまじゃくし、しじみを探った話、ほたるが飛んでいた頃の話、洪水の話、川の利用法、歴史、文学、民俗、民話など、聞く話の内容はさまざまである。子どもたちは一様に目をまんまるくしていた。フィールド・ワークで知り合った古老を学校に招いて話を聞くことになった。

「古老が先生に」——私のまともでない話を若いみなさんが一生懸命に聞いてくれてうれしかった。こんなに楽しかったことは今までなかった。長生きをしていてよかった。

鳴りやまぬ拍手が教室中に響き渡っていた。何度も頭を下げている伊藤さんの目には、涙がきらりと輝いていた。(伊藤一九〇二年〜八五年・市川市真間)

「燃えるような日々」高校受験を目の前にしているのに、子どもたちは活動を休もうとはしなかった。一〇〇ページを越える会報「ままがわ」のガリ切り。ほとんどの日曜日、休日をさいてのフィールド・ワーク、例会、合宿が続いた。(「中学の生活のなかで、思い出がひとつふえました」川が滅びれば、人間も自然もやがて滅んでゆく)「人間が生きていくためには、自然にこれ以上手を加えない方がよいかもしれない」「自然をよみがえらせる運動をしたい」などなどの言葉を残して、子どもたちは卒業していつ

た。(拙稿「地域に根ざした教育——真間川流域研究会の活動——」中学校学級担任 一九八四年・二月号・第一法規)

四 まとめ

かつてのようなのかな学外での実践は、私立・公立学校を問わず現在では不可能に近い。しかし、かつてのような閉鎖的な学校から地域の人たちに開放していく姿勢を示す学校に変身しつつあることは事実だ。ボランティア・地域の古老・職人等が絵本の読み聞かせ、民話の語り聞かせ、地域の伝統的な祭行事の話、伝統的な手仕事の話をする場を提供し、積極的に迎え入れる姿勢を示す学校も多数出てきている。

自身は現在「言語表現」の授業の一貫として民話絵本の語り聞かせをしたりさせたり、地元で伝わる「じゅえむばなし」(おどけ者話)・民話を語ったり語らせたりしている。

「聞き耳を育てる」ということは、一学校・一個人がどんなに力を注いでも高が知れている。口承文芸に対する学校自身・教員自身の学習・自覚、地域の理解と協力があって初めて実現可能になる。柳田国男が提案したことの意味を吟味することも、今日的な立場からの再評価も必要になってくるだろう。それらの手続を経て、発展的に学校教育の中に受け入れることが可能であるならば先は明るい。学校教育の中で口承文芸の新たな生命が育まれていくことだろう。

(よねや・よういち/日出学園中学・高等学校/日本民話の会)